

文部省科学研究費基盤研究 (A) : 10301010

家族生活についての全国調査 (NFR98) 報告書 No. 2-6

現代家族におけるサポート関係と高齢者介護

Support Resources and Care for the Aged of the Contemporary Family

石原邦雄・大久保孝治 編

2001年9月

日本家族社会学会
全国家族調査 (NFR) 研究会

刊行のことば

本報告書は、日本家族社会学会の全国家族調査研究会によって行われた全国家族調査（略称 NFR）の研究成果報告書『全国家族調査（NFR98）シリーズ』のうちの一冊である。

本調査の概要は、日本家族社会学会の全国家族調査（NFR）研究会によって 2000 年 7 月に刊行された報告書『家族生活についての全国調査（NFR98）-NO.1』に示されている。同報告書においては、調査のねらいとデザイン、調査結果の概要、および基礎資料が掲載されている。本シリーズとともに参照していただきたい。この『家族生活についての全国調査（NFR98）-NO.1』を第一次の報告書とすれば、今回の報告書シリーズは、第二次の報告書（NO.2）ということになる。「家族キャリア」、「親子関係」、「夫婦関係」などテーマごとの分冊（シリーズ）として刊行されることになっている。

簡単に調査の特性を示しておこう。

本調査の目的は、官庁調査では捉えきれない、家族社会学の視点による日本家族の全体像の把握、一定期間を開けて繰り返される継続調査として定点観測することによる家族変動の的確な分析、全国をカバーする確率標本による国際比較可能なデータの蓄積、そして何より、こうした信頼できる豊富なデータを研究者の間で広く共有できるようなデータの公開、などをあげることができる。

NFR98 は、大正 10 年 1 月 1 日～昭和 45 年 12 月 31 日生まれ（1998 年 12 月時点で満 28～77 歳）の男女を対象として、1999 年 1 月に実施された。対象者の確定時点にもとづいて、本データは「NFR98」と呼ばれる。層化多段抽出法で標本数は 10,500。全国 535 地点。訪問留置法で調査の実施は（社）中央調査社に委託した。

調査票は、昭和 16～45 年出生者は一般調査票、大正 10～昭和 15 年出生者は高齢者調査票を用いた。これら調査票は 19 ページまでは同一、高齢者調査票はさらに 6 ページが加わる。

回収票は 6985、回収率 66.5%。うち男性票 3323（64.35%）、女性票 3662（68.62%）である。

本調査は、文部省科学研究費（基盤研究 A 研究代表者・森岡清美「日本現代家族の基礎的研究」平成 10 年～12 年）の助成を得て可能になった。さら

には、長寿社会開発センター、アジア女性フォーラムほかにも援助を受けた。

日本家族社会学会には、費用の面だけでなく、人的かつ組織的に多大な支援を得た。本調査の企画以来、森岡清美先生、正岡寛司先生、袖井孝子先生の三人の歴代の会長にとくに感謝したい。

NFR98データの一般公開をできるだけ早い時期に実施すべく準備を進めている。本報告書シリーズを端緒として、NFR研究の継続と発展、さらには現代日本の家族研究のよりいっそうの推進が課題となろう。関係の皆様には、今後ともいっそうの御指導と御支援をお願いする次第である。

2001年3月

日本家族社会学会

全国家族調査（NFR）研究会代表

渡辺秀樹

研究組織

研究代表者 森岡清美（淑徳大学社会学部教授）

研究分担者 正岡寛司（早稲田大学文学部教授）
篠崎正美（熊本学園大学社会福祉学部教授）
松田苑子（淑徳大学社会学部教授）
石原邦雄（東京都立大学人文学部教授）
藤見純子（大正大学人間学部教授）
渡辺吉利（国際医療福祉大学医療福祉学部教授）
清水新二（国立精神・神経センター精神保健研究所室長）
渡辺秀樹（慶応義塾大学文学部教授）
神原文子（相愛大学人文学部教授）
大久保孝治（早稲田大学文学部教授）
岩井紀子（大阪商業大学総合経営学部助教授）
木下栄二（桃山学院大学社会学部助教授）
稲葉昭英（東京都立大学人文学部助教授）
嶋崎尚子（早稲田大学文学部教授）
加藤彰彦（帝京大学文学部専任講師）
田淵六郎（名古屋大学文学部専任講師）

予算

平成 10 年度	3,810 万円
平成 11 年度	130 万円
平成 12 年度	150 万円
合計	<u>4,090 万円</u>

現代家族におけるサポート関係と高齢者介護

目次

はしがき

石原邦雄・大久保孝治

第1部 家族をめぐるサポート関係

1. 社会階層とソーシャル・サポートの関連についての分析—多母集団解析簡便法の適用—
菅野剛 1
2. 年齢別サポートネットワークの構造—援助を求める行動における2つの要因—
山西裕美 21
3. 感情的依存欲求および介護期待におけるサポート・リソースの選択的認知
—家族認知およびトラブルの有無との関連において—
杉井潤子 35
4. なぜ女性は“多様な”介護ネットワークを持つのか？
—介護ネットワークの年齢差・階層差が大きい女性と小さい男性—
大和礼子 53

第2部 家族と介護

5. 高齢者介護におけるジェンダー構造
保坂恵美子 79
6. 家族の地域的特性と親の介護・看護
吉良伸一 107
7. 親の介護経験からみたインフォーマル関係の特質
佐藤友香・杉岡直人 119
8. 高齢者世帯の老親扶養に関する一考察
—中高齢者単身・夫婦世帯のデータを中心として—
菊池真弓 135
9. 彼女たちはどの親を介護したか
大久保孝治 153
10. 出生順位と介護経験
佐藤友光子 169

Support Resources and and Care for the Aged of the Contemporary Family

Edited by Kunio Ishihara & Takaji Ohkubo

CONTENT

Part1 Support Resources

1. The Relationship between Social Stratification and Social Support Tsuyoshi Sugano 1
2. The Difference of the Support Network with Ages: the Two Factors
in Asking for Social Support Hiromi Yamanishi 21
3. The Alternative Recognition of Social Support Resources
in Case of the Emotional Dependence and Care Expectation Junko Sugii 35
4. Why Do Women than Men Have More "Varied" Networks of Caring? Reiko Yamato 53

Part 2 Family and Care

5. Gender Structure of Care of the Aged Emiko Hosaka 79
6. Regional Characteristics of Family Patterns and Nursing Care of Parents
Shin-ichi Kira 107
7. Caring Experiences for the Elderly and Informal Relations Yuka Sato 119
Naoto Sugioka
8. A Study of Support for Dependant Aged Parents in Aged Household
Mayumi Kikuchi 135
9. Which Parents Has She Cared for? Takaji Ohkubo 153
10. Birth-order and Care Experience Yumiko Sato 169

はしがき

7冊シリーズとなるNFR98の第2次報告書のうち、本巻は、家族をめぐるサポート関係と高齢者介護を扱った諸論文を収めている。分析作業班の編成としては、「援助班」と「介護班」と呼ばれた近接する二つのグループの成果を合本した形になっている。

「介護班」が主に扱う項目が、介護の経験であるのに対して、「援助班」が分担した主な項目は、介護も含めたニーズの発生時を想定した上で、期待する（期待できる）サポート資源の認知を取り扱っているところが、捉え方の違いとして注意されるところであろう。

本報告書の第1部は、NFR98データのうち問30「（設定された4つの問題状況で）援助や相談相手がほしいとき、どのような人や機関を頼りにしますか」という問に対する回答を結果変数に据える分析グループ（援助班と呼ばれた）の結果をとりまとめた4本の論文からなっている。

この設問は、NFR98の基本的考え方にそって、対象者個人に対して、仮説的な4つの問題状況、すなわち

- 1) 「問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき」（＝相談など情緒的サポートニーズ）
- 2) 「急いでお金（30万程度）を借りなければならないとき」（＝手段的・金銭的サポートニーズ）
- 3) 「病気や事故でどうしても人手が必要なとき」（＝手段的・サービスニーズ）
- 4) 「あなたが寝たきりなどで、介護を必要とするようになったとき」（＝手段的・介護サービスニーズ）

といった支援を受けたい状況におかれた場合に、次の7つにカテゴライズした援助資源のうちどれを頼りにするかを複数選択（マルチ・アンサー）で回答を求める形式になっている。7つの援助資源は①配偶者、②親・兄弟姉妹、③子ども・その配偶者、④その他の親族、⑤友人や職場の同僚、⑥近所（地域）の人、⑦専門家やサービス機関（行政や金融機関・家政婦など）、である。この設問の特色は、配偶者も援助源のひとつとして近親者、友人・職場、地域などのインフォーマルネットワーク、専門家（機関）を並列にして各カテゴリーの相対的な位置づけを明らかにしようとしている点にある。これによって、「家族の個人化」や「家族機能の低下」といわれる問題などに迫ることのできるデータセットの構築が目指されていたのである。

次に4本の論文の概要に触れておこう。

菅野剛「社会階層とソーシャル・サポートの関連についての分析—多母集団解析簡便法の適用—」は、問30のデータを最も包括的に活用しながら、社会階層との関連に焦点を当てた分析を行っている。分析手法として共分散構造モデルを適用することによって、社

会経済的地位とソーシャル・サポートというどちらも直接測定することが困難な2つの潜在変数の相互関係を規定する属性的な要因を明らかにしようとした。その結果、社会経済的地位がソーシャル・サポートの求め方のパターンを規定するという影響関係が性別を越えて成立していることなどを明らかにしている。

山西裕美「年齢別サポートネットワークの構造—援助を求める行動における2つの要因—」は、高齢者層への福祉政策に関わる関心を基礎に持って、多次元尺度構成法を用いて2つの軸を析出し、これに「(援助の)有用性」、「頼みやすさ」と命名した上で、65歳以上の高齢層とそれ未満の成人層との間にみられる援助源の選択パターンの違いを説明している。そして、親族・ボランティアや行政・民間サービスといった、インフォーマルとフォーマルの双方のサポートを、ニーズに応じて気安く使い分けられような施策の方向付けを提言している。

杉井潤子「感情的依存欲求および介護期待におけるサポート・リソースの選択的認知—家族認知およびトラブルの有無との関連において—」は、他の論文が主に属性変数とサポート源選択パターンの関連を問うているのに対して、家族員として、認めるか否かの認知および親族間のトラブルの有無(問28)といった人間関係や主観性の強い変数を説明変数に立て、資源選択への影響を分析している。その結果、情緒的依存については、配偶者が主要な資源となっており、これは「家族だから頼ろうとする」家族としての再確認作業に対応しているが、子どもとの関係は他の資源に対する代替的要素を含む補償機能を備えた資源とみることができるとしている。介護ニーズに関しても関連の有意性は弱まるものの、上の情緒的ニーズと同傾向の結果として読みとれると結論づけている。

大和礼子「なぜ女性は“多様な”介護ネットワークを持つのか?—介護ネットワークの年齢差・階層差が大きい女性と小さい男性—」は、介護ニーズにしぼって、ジェンダー差に着目し、女性の方が男性に比して年齢差・階層差が大きいことの原因を、高齢期女性の階層差の中での資源選好として捉えるとともに、社会規範が動揺し変化している今日では、認知的サポートと実態(行動的サポート)の間にズレが大きくなる可能性が高いことを指摘して、行動レベルの実態との照合を今後の課題であると結んでいる。

以上の4論文は、サポート資源のネットワーク的な広がりや、対象者の社会的属性(とりわけ、ジェンダーおよび社会階層)から説明する方法と、意識や人間関係(トラブルの有無)などの側面から説明するという二つの代表的な分析視角を踏まえており、それぞれの視点における今後の展開可能性を大いに期待させるものである。また、メンバーの関心が、高齢者のサポートニーズの問題に収斂される方向性を示しているという点では、介護を扱う第2部へのひとつの導入にもなっているといえよう。

第2部は、高齢者用調査票(1920年代・1930年代出生コーホート対象:調査時年齢58~77歳)の間32~35のデータを分析の中心に据えた「介護班」の6本の論文から構成さ

れている。問 32～35 は、本人の父親・母親と配偶者の父親・母親の看取り（死へ至る介護）への対象者のかかわり方を尋ねたものである。親の介護についての調査での定番の質問は、介護される側の親を中心にして、その親を介護したのは誰かというものである（介護者の特定）。これに対して NFR98 では対象者を中心にして、4 人の親一人一人について（ただしすでに亡くなっている者に限定）「介護を必要とした期間の有無」を確認した上で、介護を必要とする期間があった親について、対象者が「介護へのかかわりの有無と程度」「介護にあたった期間」「具体的な介護の内容」「介護と相手と本人の同居・別居関係の変化」「本人の仕事への影響」について質問したのである（対象者の介護へのかかわり方の特定）。

介護される側から見るか、介護する側から見るか。それぞれ利点と欠点がある。前者のアプローチでは、親の主要な介護者はわかるが、他の親族（主要な介護者のきょうだいやその配偶者）は介護にどのようなにかかわっていたのかはわからない。後者のアプローチでは、対象者本人が 4 人の親たちの介護にどのようなにかかわったかはわかるが、対象者のきょうだいや配偶者のかかわり方はわからない（とくに対象者が介護にかかわっていなかった場合）。NFR98 が後者を採用のアプローチを採用したのは、前者より後者がすぐれているからではなく、後者のアプローチを採用することに希少価値があったからである。

以下、第二部を構成する 5 本の論文の概要を紹介する。

保坂恵美子「高齢者介護におけるジェンダー構造」は、家庭生活におけるジェンダー構造（性差の仕組み）を明らかにすることを目的として、（1）基本属性群（12 項目）、（2）夫婦関係要因群（20 項目）、（3）家族意識要因群（6 項目）、（4）生活支援要因群（4 項目）、（5）介護支援要因群（6 項目）について性差の検定（カイ自乗検定）を行ない、その上で、要因群ごとに性差を従属変数、性差の有意な諸項目を独立変数として重回帰分析を行ない、ジェンダー構造要因として説明力の高い変数の特定化を試みたものである。性差の検証を最初から介護支援要因群に限定せず、親の介護という行為が行われる場である「家庭」そのもののジェンダー構造を分析の対象とした点に特色がある。介護要因群の重回帰分析では、ジェンダー構造は義父母の介護よりも父母の介護により強く反映しているとの知見を出している。

吉良伸一「家族の地域的特性と親の介護・看護」は、対象者の性別と年齢のほかに、家族（＝世帯）類型（7 分類と 3 分類）、地域ブロック（10 分類と 9 分類と）、地域特性（3 分類）という 3 変数を導入して、親の介護と地域ブロックとの関係、親の介護と家族類型の関係を分析したものである。老親と子どもの同別居のあり方に地域差があることは広く知られている。同別居のあり方の違いは親の介護のあり方の違いに反映するから、必然的に親の介護のあり方にも地域差が見られるはずである。実際、親の介護にかかわったことで親との同別居にどのような変化があったか（なかったか）について、58～67 歳（1930 年代コーホート）の女性たちの間で、北海道と九州・沖縄では別居のままが多く、

東北と北陸では同居のままが多い、といった地域差が検証されている。

佐藤友香「親の介護経験からみたインフォーマル関係の特質」は、親の介護にかかわったグループとかかわらなかったグループ（「少しだけかかわった」者は後者に入れる）の間で、インフォーマルな関係資源（家族・親族）に対する意識がどのように異なるかを、分散分析や数量化Ⅱ類の手法を用いて分析したものである。分析の結果から、親の介護を引き受ける女性の典型は、職業は生活を自分でコントロールしやすい専門・技術職や自営業、持ち家があり、近隣関係をうまく形成している女性、というプロファイリングがなされている。

菊池真弓「高齢者世帯の老親扶養に関する一考察—中高齢者単身・夫婦世帯のデータを中心として—」は、「問題を抱えて、落ち込んだり、混乱したとき」（情緒的サポート）、「急いでお金（30万円程度）を借りなければならないとき」（経済的サポート）、「病気や事故で、どうしても人手が必要なとき」（身辺介護）、「あなたが寝たきりなどで介護が必要になったとき」（身辺介護）に誰（何）を頼りにするかという質問（問30）に対する回答を、性別・年齢（コーホート）別・世帯類型別に比較したものである。その結果、高齢者単身世帯の場合は「子ども・その配偶者」を、高齢者夫婦世帯の場合は「配偶者」を第一の援助源として選択していることなどが明らかにされた（扱っている変数の上からは第一部に入るべき論文だが、著者の問題関心はあくまでも「老親介護」にある）。

大久保孝治「彼女たちはどの親を介護したか」は、親の介護における「双系化」（自分の親と配偶者の親の双方を介護するようになる現象）を検証するために、対象者（女性に限定）が何人の親を、そしてどの親を介護したかを4つのコーホート（1920年代前半・後半、1930年代前半・後半）間で比較したものである。その結果、介護した親の数が2人以上で自分の親と夫の親の双方を介護したことのある女性は1930年代前半コーホートから増え始めていることが明らかにされた。親族関係の「双系化」はきょうだい数の少ない人口学的第三世代（1950年以降の生れ）で顕著になることが予測されているが、親の介護に関しては、子どもの数が少ないがきょうだいの多い人口学的第二世代（1925～1949年の生れ）においてすでに始まっていたのである。

佐藤友光子「出生順位と介護経験」は、対象者の出生順位と親の介護の経験との関連を論じたもので、長男や一人っ子は次三男より本人の親の介護の経験者の割合が顕著に高いこと、女性では介護経験と出生順位との間に男性におけるほど顕著な傾向はみられないこと、兄弟のいない女性は長女であるか否かを問わず親の介護の経験者の割合が高いこと、などを明らかにしている。

2001年8月

石原邦雄
大久保孝治

家族生活についての全国調査報告書 (NFR98) No. 2-6
現代家族におけるサポート関係と高齢者介護
石原邦雄・大久保孝治編
2001年9月発行

発行：日本家族社会学会・全国家族調査 (NFR) 研究会
〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学文学部大久保孝治研究室 (事務局)



古紙配合率100%再生紙を使用しています